

§2. 体の拡大, 拡大次数

定義 2.1 体 K が体 L の部分体, つまり

$$K \subset L$$

のとき, L を K の**拡大体**という. このとき, 体の**拡大** L/K ということが多い. また, M が K の拡大体で, かつ L が M の拡大体, つまり

$$K \subset M \subset L$$

であるとき, M を拡大 L/K の**中間体**という.

定義 2.2 L/K を体の拡大とする.

- (1) L の部分集合 A に対して, A を含む最小の L/K の中間体を $K(A)$ と表し, K に A を**添加した体**という.
- (2) とくに A が有限集合で $A = \{\alpha_1, \dots, \alpha_n\}$ のとき, $K(A)$ を $K(\alpha_1, \dots, \alpha_n)$ と略記する.
- (3) ただひとつの $\alpha \in L$ により $K(\alpha)$ と表される体を K の**単純拡大体**という. この場合, α を拡大 $K(\alpha)/K$ の**原始元**という.

命題 2.3 L/K を体の拡大とする. $\alpha \in L$ に対して, $K(\alpha)$ は K 上 α で生成される可換環 (すなわち, K と α を含む L の最小の部分環)

$$K[\alpha] = \{ g(\alpha) \mid g(X) \in K[X] \}$$

の商体である. したがって

$$K(\alpha) = \left\{ \frac{g(\alpha)}{h(\alpha)} \mid g(X), h(X) \in K[X], h(\alpha) \neq 0 \right\}$$

が成り立つ.

証明 $K(\alpha)$ は K と α を含む体だから, $g(X), h(X) \in K[X]$ とすると $g(\alpha), h(\alpha) \in K(\alpha)$, さらに $h(\alpha) \neq 0$ であれば $g(\alpha)/h(\alpha) \in K(\alpha)$. 一方,

$$\left\{ \frac{g(\alpha)}{h(\alpha)} \mid g(X), h(X) \in K[X], h(\alpha) \neq 0 \right\}$$

は L の部分体なので, $K(\alpha)$ の最小性から命題の主張は正しいことがわかる. $\square$

例 2.4 有理数体 $\mathbf{Q}$ の拡大体について, いくつかの例をあげる.

$$(1) \mathbf{Q}(\sqrt{2}) = \mathbf{Q}(\sqrt{2} - 1) = \mathbf{Q}\left(\frac{1}{\sqrt{2}}\right) = \mathbf{Q}\left(\frac{1 + 3\sqrt{2}}{5 - 7\sqrt{2}}\right)$$

最初の等号は,

$$\sqrt{2} - 1 \in \mathbf{Q}(\sqrt{2}) \text{ だから } \mathbf{Q}(\sqrt{2} - 1) \subset \mathbf{Q}(\sqrt{2}),$$

$$\sqrt{2} = (\sqrt{2} - 1) + 1 \in \mathbf{Q}(\sqrt{2} - 1) \text{ だから } \mathbf{Q}(\sqrt{2}) \subset \mathbf{Q}(\sqrt{2} - 1)$$

よりわかる. 真ん中の等号はどうよ? 最後の等号は,

$$\alpha = \frac{1 + 3\sqrt{2}}{5 - 7\sqrt{2}} \text{ とおけば } \sqrt{2} = \frac{5\alpha - 1}{7\alpha + 3} \in \mathbf{Q}(\alpha)$$

となることを使えばわかるはず.

$$(2) \mathbf{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3}) = \mathbf{Q}(\sqrt{2} + \sqrt{3}) = \mathbf{Q}(\sqrt{2} - \sqrt{3})$$

$\sqrt{2} + \sqrt{3} \in \mathbf{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3})$ より $\mathbf{Q}(\sqrt{2} + \sqrt{3}) \subset \mathbf{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3})$ は OK. 一方, $\beta = \sqrt{2} + \sqrt{3}$ とおけば, $\frac{1}{\beta} = \sqrt{3} - \sqrt{2}$ が成り立ち,

$$\mathbf{Q}(\sqrt{2} + \sqrt{3}) = \mathbf{Q}(\beta) = \mathbf{Q}\left(\frac{1}{\beta}\right) = \mathbf{Q}(\sqrt{2} - \sqrt{3}).$$

さらに,

$$\sqrt{2} = \frac{\beta - \frac{1}{\beta}}{2} \in \mathbf{Q}(\beta), \quad \sqrt{3} = \frac{\beta + \frac{1}{\beta}}{2} \in \mathbf{Q}(\beta)$$

よって, $\mathbf{Q}(\sqrt{2}, \sqrt{3}) \subset \mathbf{Q}(\beta) = \mathbf{Q}(\sqrt{2} + \sqrt{3})$.

$$(3) \mathbf{Q}(\sqrt[3]{2}) = \mathbf{Q}(\sqrt[3]{4})$$

$\gamma = \sqrt[3]{2}$, $\delta = \sqrt[3]{4}$ とおけば, $\delta = \gamma^2$ より $\mathbf{Q}(\delta) \subset \mathbf{Q}(\gamma)$. 逆に, $\gamma = \frac{\delta^2}{2}$ より $\mathbf{Q}(\gamma) \subset \mathbf{Q}(\delta)$.

$$(4) \mathbf{Q}(\mathbf{Z}) = \mathbf{Q}, \quad \mathbf{Q}(\mathbf{R}) = \mathbf{R}, \quad \mathbf{Q}(\mathbf{R}, \sqrt{-1}) = \mathbf{C}, \quad \mathbf{Q}(\sqrt{-1}) \subsetneq \mathbf{C}$$

定義 2.5 L/K を体の拡大とすると, L は K 上のベクトル空間ともみなすことができる (L における和をベクトルの和, K の元に L の元をかける操作をスカラー倍とする). このとき, K 上のベクトル空間としての L の次元を拡大 L/K の次数といい

$$[L : K]$$

で表す. $[L : K]$ が有限のとき, L/K は有限次拡大であるといい, そうでないとき無限次拡大であるという.

例 2.6 (1) $\mathbb{Q}(\sqrt{7})$ は $\mathbb{Q}$ 上 2 次拡大である, $[\mathbb{Q}(\sqrt{7}) : \mathbb{Q}] = 2$.

だって, $1, \sqrt{7}$ は, $\mathbb{Q}$ 上 1 次独立だし, $\mathbb{Q}$ 上 $\mathbb{Q}(\sqrt{7})$ を生成してるから, $\mathbb{Q}$ 上 $\mathbb{Q}(\sqrt{7})$ の基底だもん.

(2) $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{5})/\mathbb{Q}$ は 3 次拡大である, $[\mathbb{Q}(\sqrt[3]{5}) : \mathbb{Q}] = 3$.

なぜかという, $1, \sqrt[3]{5}, \sqrt[3]{25}$ は $\mathbb{Q}(\sqrt[3]{5})$ の $\mathbb{Q}$ 上の基底だから.

補題 2.7 M を体の拡大 L/K の中間体とし, $\alpha_1, \dots, \alpha_m \in M$, $\beta_1, \dots, \beta_n \in L$ とする.

$\alpha_1, \dots, \alpha_m$ が K 上 1 次独立であり, かつ $\beta_1, \dots, \beta_n$ が M 上 1 次独立

ならば, mn 個の L の元 $\alpha_i \beta_j$ ($i = 1, \dots, m, j = 1, \dots, n$) は K 上 1 次独立である.

証明 mn 個の元 $\alpha_i \beta_j$ に K 上の線形関係

$$\sum_{i=1}^m \sum_{j=1}^n c_{ij} \alpha_i \beta_j = 0 \quad (c_{ij} \in K)$$

があったとする. このとき, すべての i, j に対して $c_{ij} = 0$ が成り立つことを確かめればよい. いま, 上式を書き換えて

$$\sum_{j=1}^n \left(\sum_{i=1}^m c_{ij} \alpha_i \right) \beta_j = 0$$

を考えると, $\sum_{i=1}^m c_{ij} \alpha_i \in M$ であり, $\beta_1, \dots, \beta_n$ が M 上 1 次独立という仮定から,

$$\sum_{i=1}^m c_{ij} \alpha_i = 0 \quad (j = 1, \dots, n)$$

を得る. さらに, $c_{ij} \in K$ であり, かつ $\alpha_1, \dots, \alpha_m$ が K 上 1 次独立という仮定から

$$c_{ij} = 0 \quad (i = 1, \dots, m, j = 1, \dots, n)$$

が導かれる. □

補題 2.8 M を体の拡大 L/K の中間体とし, $\alpha_1, \dots, \alpha_m \in M$, $\beta_1, \dots, \beta_n \in L$ とする.

$\alpha_1, \dots, \alpha_m$ が K 上 M を生成し, かつ $\beta_1, \dots, \beta_n$ が M 上 L を生成する

ならば, mn 個の L の元 $\alpha_i \beta_j$ ($i = 1, \dots, m, j = 1, \dots, n$) は K 上 L を生成する.

証明 任意の $\gamma \in L$ が, mn 個の元 $\alpha_i \beta_j$ の K 上の 1 次結合で表されることを確かめる.
いま, $\beta_1, \dots, \beta_n$ が M 上 L を生成するので,

$$\gamma = \sum_{j=1}^n b_j \beta_j$$

をみたす $b_j \in M$ が存在する. さらに, $\alpha_1, \dots, \alpha_m$ が K 上 M を生成するという仮定から,

$$b_j = \sum_{i=1}^m a_{ij} \alpha_i \quad (j = 1, \dots, n)$$

となる $a_{ij} \in K$ がとれる. よって,

$$\gamma = \sum_{j=1}^n \left(\sum_{i=1}^m a_{ij} \alpha_i \right) \beta_j = \sum_{i=1}^m \sum_{j=1}^n a_{ij} \alpha_i \beta_j$$

と書け, γ が $\alpha_i \beta_j$ たちの K 上の 1 次結合で表されることがいえた. □

定理 2.9 M を体の拡大 L/K の中間体とすると,

$$[L : K] = [L : M][M : K]$$

が成り立つ. とくに, L/K が有限次拡大であるためには, L/M , M/K がともに有限次拡大であることが必要十分である.

証明 $\alpha_1, \dots, \alpha_m$ を M の K 上の基底, $\beta_1, \dots, \beta_n$ を L の M 上の基底とすると,

$$m = [M : K], \quad n = [L : M].$$

ここで, 補題 2.7 より, mn 個の元 $\alpha_i \beta_j$ は K 上 1 次独立だから

$$[L : K] \geq mn = [L : M][M : K],$$

一方, 補題 2.8 より, L は K 上 mn 個の元によって生成されるから,

$$[L : K] \leq mn = [L : M][M : K]$$

が成り立ち, したがって等式が導かれる. □